



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道B町における高齢者の生活と行方
Author(s)	鳥山, まどか; 阿部, 峰子; 磯野, 由佳 他
Citation	教育福祉研究, 0016, 67-76
Issue Date	2010-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46811
Type	departmental bulletin paper
File Information	Toriyama.pdf



北海道 B 町における高齢者の生活と行方

鳥山 まどか・阿部 峰子・磯野 由佳・川向 奈月
渋谷 麻美・館下 理央・田村 幸江・那須 優香

はじめに

本稿は、平成 21 年度の北海道大学教育学部・教育福祉研究グループに所属する学部学生(3 年生)を対象とした「社会福祉調査実習」において行われた社会調査『北海道における高齢者の生活と行方』の結果の概要について報告するものである。

これまで、『教育福祉研究』10(2)号および 11 号においても、社会福祉調査実習として実施した高齢者世帯調査について報告しているが、そこでの論考では「貧困の世代的再生産」を一つの視点に据えていた。そのため、調査対象者に生活保護受給世帯や低所得世帯が一定数含まれるような調査設計を行うなどしていた。一方、今回の B 町の調査は、今後の高齢者の「終の棲家・生き方」の決定(選択)をめぐる諸課題を明らかにすることを目標としており、「貧困」についてはいったん脇に置いている。

1. B 町の概要

B 町は人口およそ 3000 人、そのうち 65 歳以上高齢者が 1000 人を占め、高齢化率は約 33%と北海道内でも高齢化率の高い地域である(北海道全体の高齢化率は 23.7%。平成 21 年 3 月 31 日現在)。また、北海道全体での人口密度が 1 平方キロメートル当たり 66.76 人(平成 20 年 3 月 31 日現在)であるのに対し、B 町は 1 平方キロメートル当たり 10.0 人となっている。

主要産業としては、開拓時からの農業(畑、田、酪農)がその一つとしてあげられるが、丘陵地帯や台地が中心で平坦地もそのほとんどが泥炭地帯であり、さらに、地形の特性による春から夏にか

けての濃霧の発生とそれによる低温、そして積雪量の多さという、農業を営む上で、また生活する上では悪条件のもとでの開拓であったといわれる。平坦地の少なさは、1 か所あたりの農地面積を制限し、現在も、1 件の農家が経営できる規模を物理的に制約する要因になっている。

いわゆる「産業」ではないが、B 町の特徴として、昭和 30 年代という早い時期から社会福祉施設が開設されており、高齢・障がい・児童等の社会福祉施設が充実していることがあげられる。これらの施設で生活する人や働く人も少なくない。B 町の人々にとって、高齢者関係に限らず「社会福祉施設」は比較的身近な存在であるといえる。

B 町の高齢者を対象とした福祉や医療の現状であるが、入所施設としては特別養護老人ホーム、老人保健施設、養護老人ホームがある。在宅サービスとしてはデイサービス、デイケア、ヘルパー、訪問看護、配食サービスが提供されている。また、社会福祉協議会の取り組みとして、独居で周囲とのかかわりが少ない高齢者を対象とした、ボランティアによる電話や訪問での安否確認、緊急通報システム設置、紙オムツ支給、町内外への移送サービスがある。一方、医療機関は内科と外科の病院と歯科があるのみであり、その他専門の科にかかるためには町外の病院で受診しなければならない。その通院あるいは買い物の際の移動手段としては、上記移送サービスのほか、福祉バスが週に数回巡回している。自家用車のない 70 歳以上の高齢者に対しては、町からハイヤーの利用券が配布されており、通院や買い物にこれを利用している人もいる。

2. 調査の概要

2009年9月29日～10月1日にかけて、B町に在住するひとり暮らし高齢者世帯および高齢夫婦世帯に聞き取り調査を実施した。調査の実施にあたっては、対象者の選定や調査依頼、訪問日時の調整等、B町地域包括支援センターの協力を多くを負っている。今回の調査にご協力いただいた世帯の概要をまとめたのが表1、表2である。

夫婦世帯が9世帯、ひとり暮らし世帯が16世帯であった。また、ひとり暮らし世帯のうち、女性が11名、男性5名である。ひとり暮らしとなった理由のほとんどは「死別」であるが、「離別」を理由とする者が2名、配偶者が施設入所中である者が1名、同居していた親の死亡による者（婚姻経験なし）が1名あった。

表2には、対象者の現在の健康状態と通院の有無、利用している福祉サービスについてまとめている。多くの方が「おおむね健康」であるが、それが一人あるいは夫婦のみで在宅で地域生活を送る条件であり、この結果は当然だともいえる。

だが、年齢的なものもあり、ほとんどの人が定期的な通院をしている。B町での生活において不便と感じていることとして最も多く語られたのが、この「病院」に関することである。町の概要で述べたように、B町内の病院・診療所は内科、外科、歯科のみであり、女性に多い「膝の手術」やその他の大きな病気、手術、検査等のためには、町外の病院まで行かなくてはならない。近隣に家族がいて、病院への送り迎えをしてもらっている人もいるが、そうした私的な支援を受けられない人の場合は、日に数本しかないJRを使うか、社会福祉協議会の移送サービスを使うしかない。移動時間もとられるため、場合によっては宿泊も必要になる。配偶者の入院を経験している事例も少なからずみられた（全く経験のない世帯の方が例外的である）が、長期にわたって入院していた配偶者の世話のために町外の病院へ通う大変さがしばしば語られた。

3. 調査結果より—B町で生活すること

(1) B町に住み続ける—生活の「安定」の帰結

表3にまとめたのは、対象者の親の仕事と本人の学歴・職歴・居住地の変遷である。これを見てわかるように、B町や近隣の町村で生まれ育っている者が非常に多い。親の仕事として最も多いのが「農業」である。「今こそ農業なんて誰もやらないけど、戦時中は農業ほどいい職業はなかった」（事例3）のである。彼女・彼らの親世代は、開拓で道外からB町にやってきた世代にあたる。しかしながら、B町の概要でも述べたように、B町は農業を営むには気候や地形の条件が悪く、「戦後の開拓部落で成功した人はほとんどいない」（事例6）、「同じころ農業やってた人たちは今みんな離農しちゃった。自殺した人もいっぱい」（事例3）いたそうである。そのような中で唯一成功したのは東北地方、特に秋田県からやってきた人々であったという。秋田県からの集落に看護師として往診に行っていた事例6によると、その集落の人たちは地元（秋田）から米を送ってもらって、食いつなぎ、自分たちで食べない分を売りながら乗り切っていたのだという。

こうしてみると、本人の世代で農家を続けているのは、たとえ小規模経営であっても「生き残れた」農家であり、その意味で「成功した」農家であるといえよう。ただし、道外の開拓より後の時期に、いわゆる「次三男対策」として新たにB町で農業を始めた人の場合、残された土地はより劣悪なものであり、困難はより大きかったものと推察される。

本人や世帯主の就いていた仕事としても「農業」は多いのだが、それに次いで多くみられるのが「公務員」や「郵便局の職員」である。B町においては今も昔も、これらはいわゆる「安定職」の代表的なものであるといえる。学校卒業後にこれらの仕事につき、定年まで同じ仕事を続けてきた人も多い。そしてこれらの仕事を退職した現在は、厚生年金や共済年金を受けて生活している。公務員や郵便局員であった夫と死別した女性たちも、夫

表 1 調査世帯の概要①

事例	年齢	性別	一人暮らしの理由	収 入	収入種類	仕 事	住 宅
1	69 歳	女性	夫 (73 歳) が施設に入所	—	国民年金、厚生年金	働いていない	持家
2	75 歳	女性	死別	月 17 万円弱	国民年金、遺族年金(共済)	働いていない	持家
3	77 歳	女性	死別	年 70 万円位	国民年金	働いていない	公営住宅
4	79 歳	女性	死別	月 20 万円位	年金	働いていない	持家
5	79 歳	女性	死別	月 15 万円位	国民年金、遺族年金(共済)	働いていない	持家
6	81 歳	女性	離別	月 20 万円位	共済年金	働いていない	持家
7	82 歳	女性	死別	年 50 万円未満	国民年金	働いていない	持家
8	82 歳	女性	死別	年 50～100 万円	国民年金	働いていない	公営住宅
9	87 歳	女性	死別	—	遺族年金	働いていない	持家
10	88 歳	女性	死別	年 100～150 万	厚生年金	働いていない	持家
11	90 歳	女性	死別	—	国民年金、遺族年金(厚生)	働いていない	持家
12	67 歳	男性	母親の死亡(婚姻歴なし)	—	国民年金、生活保護	働いていない	公営住宅
13	77 歳	男性	死別	—(生活には十分)	共済年金	働いていない	持家
14	80 歳	男性	離別	—	国民年金、生活保護?、大工仕事の収入	時々大工仕事	公営住宅
15	80 歳	男性	死別	—	厚生年金	働いていない	公営住宅
16	81 歳	男性	死別	月 6 万円	国民年金	酪農(小規模)	持家
17	夫 69 歳 妻 70 歳	—	—	月 20 万円 月 20 万円	厚生年金 厚生年金	働いていない	持家
18	夫 71 歳 妻 69 歳	—	—	—	共済年金 国民年金 貸地料収入	働いていない	持家
19	夫 73 歳 妻 68 歳	—	—	2 人合わせて月 20～24 万円	共済年金、農協の年金	働いていない	—
20	夫 73 歳 妻 70 歳	—	—	年 500 万円 年 100 万円	共済年金 国民年金	働いていない	持家
21	夫 78 歳 妻 73 歳	—	—	2 人で年 350 万円	共済年金 国民年金	働いていない	持家
22	夫 81 歳 妻 89 歳	—	—	2 人で月 20 万円	国民年金、共済年金、農業者年金	働いていない	持ち家
23	夫 81 歳 妻 74 歳	—	—	年 150～200 万円	国民年金	働いていない	持ち家
24	夫 84 歳 妻 81 歳	—	—	年 150～200 万円	国民年金、議員年金	働いていない	持ち家
25	夫 87 歳 妻 83 歳	—	—	2 人で月 24 万円	厚生年金、共済年金	働いていない	持ち家

注) 表内の「—」は、該当しないもの、あるいはその項目に相当する回答がなかったものである。以下同じ。

表2 調査世帯の概要②

事例	健康	通院	介護・福祉サービス
1	おおむね健康	町内病院(血圧、甲状腺)、夫の検査は町外の病院	夫が施設に入所 社協の移送サービス
2	軽いうつ、不眠	町外病院	—
3	おおむね健康	町内病院(骨粗鬆症)	デイサービス
4	おおむね健康	—	デイサービス
5	血圧、ひざ、骨粗鬆症	町内病院	—
6	狭心症、身障2種4級(ひざ)	町内病院、町外病院	社協の移送サービス
7	おおむね健康	町内病院(血圧、めまい)	安否確認の訪問サービス
8	腰を痛めた	町内病院(骨粗鬆症)	—
9	おおむね健康	町内病院(血圧、水虫)	デイサービス
10	おおむね健康	町内病院(心臓疾患、静脈瘤)	デイサービス
11	おおむね健康	町内病院	デイサービス、安否確認訪問サービス
12	片足の感覚が鈍い	町内病院、年2回町外の病院で検診	社協の移送サービス
13	—	町外の病院	—
14	脳梗塞の後遺症	町内の病院	訪問看護
15	おおむね健康	町内の病院(血圧)	—
16	高血圧	町内の病院	ヘルパー
17	夫：前立腺 妻：脳内出血による身体障害、リハビリ中	—	要介護2、介護ベッドのリース
18	夫：おおむね健康 妻：おおむね健康	夫：町内の病院(糖尿) 妻：町内の病院(歯科)、町外の病院で年1回検診	—
19	夫：身障2種4級 妻：おおむね健康	妻：町内の病院	—
20	夫：おおむね健康 妻：おおむね健康	—	—
21	夫：足に脳梗塞の後遺症 妻：脳内出血の後遺症	町内の病院、町外の病院での検診	—
22	夫：おおむね健康 妻：おおむね健康	町内の病院	—
23	夫：いくぶん問題がある 妻：いくぶん問題がある	町内の病院に2人で行く	—
24	夫：いくぶん問題がある 妻：いくぶん問題がある	町内の病院	—
25	夫：おおむね健康 妻：いくぶん問題がある	町内の病院	デイサービス

の遺族年金のほか、夫の残した預貯金や保険、持家などがあったため、死別後に急に困窮してしまうといった事例は見られなかった。一方で、今回の調査においては、男性のひとり暮らし世帯の中

に、年金を満額受け取っていない事例が見られたが(事例12.14)、「本当、最低限で、カラオケなんて行ったら赤字」(事例12)というように、生活のゆとりのなさもうかがわれた。とはいえ、今回の

調査協力者においては、明らかに「困窮している」状況について語られることはほぼなかったといっている。

以上のような傾向は、調査協力者世帯の多くが、親世代も、本人も、仕事や生活が比較的安定していたからこそ、B 町に住み続けることができた結果であるとも考えられる。それでは、B 町で（数が限られた）安定職に就くことができなかった人たち、農業経営が不振になった人たち、資産や蓄

えのないまま配偶者との離死別に遭遇した人たちは、その後も B 町での生活を続けているのだろうか。B 町での生活の継続が可能であるとすれば、個人や家族を支えている資源が何かあるのだろうか。B 町で生活が続けられなかったとすれば、その人たちや家族はどこに行ってしまうのだろうか。これらは今後の研究課題である。

(2) 役割を果たす生活

生まれてからずっと B 町に住んできた人が多

表 3 出生から現在までの経歴（仕事を中心に）

事例	出生地と親の仕事	最終学歴	これまでの仕事	居住地
1	B 町	妻：高校、 夫：高校	役場～アルバイト (夫：鉄道～体育館管理人)	ずっと B 町
2	町外	高校	家事手伝い～専業主婦～季節保育所（10 年）	昭和 30 年代に B 町に転入
3	道外・農業	—	農業（畑～稲～酪農）～食品工場	結婚してすぐに次三男対策で B 町に開拓に来た
4	町外（近隣）・漁師	尋常小学校	保育士 (夫：郵便局)	夫の退職後に夫の故郷である B 町へ
5	町外（近隣）・農業	—	畑の手伝い～土建会社 (夫：公務員)	結婚後 B 町
6	B 町・農業	高等女学校～看護学校	看護師～専業主婦～離婚後看護師（定年まで）	町外で看護師～結婚後 B 町
7	B 町・農業	小学校	農家	ずっと B 町
8	B 町・馬	—	16 歳から土方 (夫：あめ作り職人や土方の仕事など転々と)	B 町
9	町外（近隣）・豆腐屋	小学校	結婚前たばこ屋（10 年）～農家の手伝い (夫：郵便局)	結婚後 B 町
10	町外（近隣）・郵便局	中学校	道外の役場～工場～切符売り～B 町で病院の厨房 (夫：道外デパート、航空、洋服屋)	道外～昭和 40 年代から B 町
11	B 町・農業	—	営林所（20 年） (夫：道外の鉱山～B 町で鉄道～建設)	昭和 20 年代はじめから B 町
12	B 町・農業	中学校	町外で道路の仕事～B 町に帰って農業	町外～B 町
13	B 町	中学校教員養成所	B 町および近隣小中学校教員 (妻：小学校教員～結婚を機に退職)	B 町および近隣町村

事例	出生地と親の仕事	最終学歴	これまでの仕事	居住地
14	道外～B町・農業	小学4年まで。戦後中学校に。	大工 (妻：アルバイト)	道内を転々と(仕事のある場所)。冬は道外に出稼ぎ～50歳の時に親にB町に呼び寄せられる
15	B町・農業	—	農業～建設会社	ずっとB町
16	町外、幼小時に両親と死別	小学校	町外で水田～土方 (妻：酪農)	町外～結婚後、開拓でB町
17	夫：町外・鉄道員 妻：道外・苗畑事業手伝い	高校 高校	公務員(定年まで) 公務員(定年まで)	夫：小学生の時にB町に 妻：戦後の引き上げでB町に
18	夫：町内・農業 妻：町外(近隣)・農業	高校 —	役場と実家の農業の手伝い 子どもに手がかからなくなってからアルバイト	近隣町の役場に勤めていたが、10数年前にB町に現在の住居を建築
19	夫：町外(近隣)・国鉄 妻：町外・炭鉱	高校	国鉄・機関士～役場事務	就職がB町の役場
20	夫：B町・農業 妻：郵便局	中学	役場雑務～正職員	ずっとB町
21	夫：B町 妻：のちにB町	小学校 中学校	郵便局員 福祉施設～結婚後専業主婦	ずっとB町
22	夫：B町・漁師～農業 妻：B町	高等科	材木運搬(70歳まで)～B町キャンプ場管理人(75歳まで) 米づくり(妻が主)	ずっとB町
23	夫：B町・農業 妻：道外～B町(小5)・農業	尋常小学校 小学5年まで	酪農(70歳まで) 酪農と飲料水の工場(昨年まで)	ずっとB町
24	夫：B町・農業	尋常小学校	役場～議員	ずっとB町
25	夫：B町・出稼ぎ 妻：B町・農業	高等学校	駅員～公社～郵便局員 ～施設事務局長 実家の酪農の手伝い	ずっとB町

いということ、近隣に昔からの顔馴染みが多いということでもある。B町には老人クラブやボランティアサークル、大正琴の会、女性会など高齢者が参加できる団体が複数存在するが、もともとの顔馴染み同士の自主活動に由来する団体も少なからずあり、それが現在では「高齢者が利用する資源」として位置付けられている場合もある。表4に、現在参加している活動をまとめた。

これらの活動には、自分たち自身の楽しみや交

流を目的として行われているものもあれば、他者への働きかけ(支援や娯楽の提供など)を目的としている活動もある。他者への支援を目的とした活動としては、たとえば、芸能奉仕団は老人ホーム等への慰問を行い、女性会はひとり暮らし高齢者にお世ちを届けるなどの活動を行っている。近隣の除雪を請け負うグループもある。祭りなど昔ながらの町の行事で、表に立つ「男の人たち」とそれを裏から支える「女の人たち」として参加す

表4 人間関係、社会関係（人づきあい、社会活動への参加）

事例	近所づきあい	頼みごとができる人、頼りになる人	参加している活動
1	よくある	近所の人、老人クラブの人	老人クラブ
2	よくある	近所の友人、向かいの人	老人クラブ
3	よくある	娘	デイサービス
4	よくある	—	老人クラブに入っていたが今は参加していない
5	よくある	いる	老人クラブ、リハビリ教室
6	よくある	甥	ボランティア、女性会、陶芸
7	—	近所の若い夫婦、弟	—
8	よくある	—	—
9	よくある	近所の人、事業団	老人クラブ
10	あまりない	甥、嫁	大正琴、リハビリ手伝い
11	よくある	昔から知っている隣近所	—
12	あまりない	役場の人	一面倒、面白くない
13	よくある	ライオンズクラブの人たち	パークゴルフ、ライオンズクラブ
14	—、茶飲み友だち	—	—
15	よくある	頼られる方が多い	ボランティア、地域グループ
16	—	娘	老人クラブ
17	よくある	町内会の人、隣近所の親しい人	夫：パークゴルフ、バンド、料理教室
18	—	—	老人クラブ、町内会、お寺
19	ほとんどない	近所の区長さん、配偶者	体操指導員、統計調査員、女性会、町内会
20	よくある	—	福祉施設理事など
21	よくある	老人クラブの友人	老人クラブ
22	よくある	友人	老人クラブ
23	あまりない	夫婦でいるので、特に他の人に頼むことがない	老人クラブ、年数回の生涯学習
24	よくある	近所に住む親戚	老人クラブ
25	よくある	息子夫婦	老人クラブ、芸能奉仕団

る人たちもいる。また、社会福祉協議会によるひとり暮らし高齢者への安否確認のボランティアとして参加している人もみられる。

このように、行政等から見れば「高齢者」ではあるが、同時に、B 町の高齢者福祉の支え手としての役割や B 町の折々の行事における役割を果たしている人は少なくない。そこで「困った時はお互いに助け合う」という認識が形成されている（あるいはそのような認識があるからこそこれらの活動に参加している）と同時に、これらの活動への参加はやはり「楽しみ」でもある。ここでの

人間関係と友人関係や日常の付き合いとは重なり合っているし、ちょっとした頼みごとをできる人や相談に乗ってくれる人というのもこれらの関係性と重なり合って存在している。

したがって、これらの活動が盛んな人たちは、隣近所との付き合いも比較的密である。ちょっとした事を頼んだり頼まれたり、お茶を飲み立ち寄りたり、自宅で作った野菜をあげたりもらったという近所づきあいが見られ、日々の暮らしに「これという心配事はない」という安心感や「住み心地のよさ」にもつながっているといえる。ただ

し、隣近所もやはり「高齢者世帯」であり、入院や亡くなるなどで、物理的に近所づきあいができなくなってきているという問題がある。そもそもB町の中心地以外では、家ごとの距離が離れているために行き来が簡単ではないのだが、高齢になるとともに隣近所に足を運ぶことがどんどん難しくなっている。行事への参加する者も年々減少傾向にあるという。結果として、近所づきあいのものが減っているという実感がもたれている様子がかがえる。

「今までは隣近所も（付き合いが）あったけど、隣の人にも亡くなって…。昔は牛飼いの後、隣近所で遊び歩いてたけど、最近はみんな亡くなって、全然しない」（事例23）

一方で、隣近所との関係をあまり好まないような発言も一部に見られた(事例10,12)。事例10については、後述するように、親戚との比較的密な関係がそれを補っている。事例12は婚姻経験がなく、したがって子もないため、近隣関係の少なさを補う親戚関係はそもそも得られない。「いつ死ん

表5 子世帯や親戚との関係

事例	子の所在	行き来	援助関係
1	町内2人、道外1人	電話・メール、年1回は来る	夫の検査時の町外病院への送迎、宿泊
2	町外2人	あまりない	—
3	町内1人、道外1人	町内の子は週3回来る	孫への小遣い程度
4	町内2人、道外1人	長男家族の同居のため住居を改装中	—
5	町外1人、道外1人	数日おきに電話	大きな買い物
6	道外2人	電話、年数回の訪問	—
7	町内1人、町外1人、道外2人	あまりない	ない
8	町内2人、町外1人	電話	—
9	町外4人	甥や姪がよく来てくれる、電話	—
10	2人	嫁が毎月来てくれる	甥や嫁が時々来て世話してくれる
11	町外4人	—	—
12	—	—	—
13	町内1人、町外1人	—	—
14	町外2人	年数回来る	—
15	県外2人、町外2人	しょっちゅう来る	重度障害の子(町外の病院に入院)の後見人
16	町外2人	娘が相談に乗ってくれる	悩み事の相談
17	道外2人	年数回来る	子世帯に対する経済的支援
18	道外2人	年数回来る、たまに電話	—
19	同居1人、町外2人	よくある	長男と同居
20	町内1人、道外1人	よくある	—
21	町外1人、道外1人	年に1、2回帰ってくる	退職時に子に対して金銭贈与
22	町外2人	年数回来る	経済的援助
23	町外3人	電話、旅行に連れて行ってもらう	—
24	町内2人、町外1人	しょっちゅう訪ねてくる	—
25	町内1人、町外1人	すぐ隣に住んでいる	孫への小遣い程度

でもいい」、「あとは死ぬのを待つだけだ」という発言が目立った。だが、そのような中でも、「役場の人」は「しゃべりやすいし、わかっているから」頼りにしているのだという。公的なつながりが私的なつながりを補っているといえよう。

自分の子どもや親戚との関係についてまとめたのが表5である。同居や近居を除けば、隣近所との関係が密であるのに比べ、子世帯や親戚との日常での関係は、主に電話のやり取りのレベルにとどまる。だが、本人や配偶者が B 町外の病院に通院する時や B 町外の病院に入院した時などには、子どもから手助けを得ている場合が多い。

「子どもには子どもの生活がある」から迷惑はかけたくないという思いから、あるいは、「これから住み慣れた B 町にとどまり続けたい」という理由から、今後取り得る選択肢の中に「子どもとの同居」を入れていない人は多い。子どもやその配偶者が定年後に B 町に帰ってくるという話でもあれば、そこではじめて同居も考えるが、そうでなければ、今住んでいる家を手放して出ていかねばならず、その方がむしろ不安であると感じる人が多いようである。

(3) 目に見える、身近な施設の存在

調査協力者のほとんどは、長年暮らしてきた住み慣れた地域・家で、今までの生活をできるだけ続けていくことを希望している。B 町を「終の棲家」としたいと考えているのである。それでは、今住んでいる住宅を「終の棲家」にしようと考えているかといえば、そうではないようである。今の家に住み続けることが理想であり、ヘルパーの活用などにも前向きであるが、配偶者が亡くなったら、あるいは、自分で火の始末ができなくなったり、体の自由が利かなくなったりすれば、ひとりで家を維持することは難しいだろうという予測も持っている。そうなったときには、B 町にある「施設」に入所できるのが良いだろうと考えている。

B 町の概要でも触れたが、この町の人々にとって、「施設」は身近な存在である。知り合いや親戚が入所していたり、施設職員であったりするし、

たとえば老人保健施設で実施されているリハビリや健康相談会に参加するために、実際に足を踏み入れたりする機会を持ったことのある人も多い。そのため、施設での生活がより具体的にイメージでき、また、「B 町は福祉が充実しているから安心」という町民としての自負も、施設に対する抵抗感を弱めているようである。

だが一方で、非常に具体的にイメージができてしまうが故に、B 町にはない形態の暮らし方を「希望」として述べる人が少ない。あたかも人々にとっては「在宅か施設か」の二者択一であり、たとえば「気心の知れた人と生活するグループホーム」(事例 17)のようなものを、今後充実させてほしいものとして述べる人は少数であった。

おわりに

はじめに述べたように、この調査は学生の「社会福祉調査実習」としても位置付けて実施した。調査に参加した学生の多くは、これが初めての「社会調査」の経験であった。学生たちは調査終了後に口頭で、あるいはメモの形で感想を述べているが、ここでは、事例 14 の聞き取りを担当した学生の所感を引用しておきたい。

(調査の)最後の最後で、お子さんと血がつながっていないことがわかったけれど、やはりご本人にとっても触れたくないことだったのだと思う。現在はヘルパーさんやサークルの友人、娘さんや地域包括支援センターの職員さんがこまめに連絡を取っていて、何かあった時の連絡先は心配なさそうだった。肉牛を続けるか悩んでいたけれど、ご本人が「生き物好き」と何度も話していたので、私も、お金はかかるけれどできるだけ肉牛は続けてほしいと思った。奥さんを亡くし、今まで子育てで苦勞してきた上での一人暮らしなので、現在もさみしいだろうから、なおさら「がんばれること」は失ってほしいと感じた。

特に男性単身世帯に、上記のような「事情」を

抱え、それが現在の生活課題にも少なからず影響を与えていることが伺われる人が見られた。調査実習の中での、たった1回の聞きとりの中では、その一端をとらえるのがやっとであったろうし、それについても本報告の中で十分に示すことはできなかった。

ただ、過去の調査との比較でいえば、女性は経済的な安定を得られるか否かが大きい（その意味で今回の対象者は安定している）のに対し、男性はそれに加えて、社会関係を築くことができているか否かが現在の生活を左右しているように見える。様々な「事情」を抱えていれば、関係性を築くことにはより困難がともなうであろう。

それぞれの過去にも寄りそいながら、「関係性」（それは時には、公的なつながりかもしれない）も含めての安心できる、安定した「終の棲家」のあり方の模索とその保障が、今後の高齢者福祉の課題の1つとなるだろう。

文献

- 青木紀ほか（2004）「調査ノート：高齢者一人暮らし世帯の貧困—貧困の世代的再生産の視点から—」『教育福祉研究』10(2) 1-15。
- B町（1992）『B町町史』（上・下巻）ぎょうせい。
- 北海道保健福祉部（2010）「北海道高齢者人口の状況」（<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/khf/index>, 2010.2.10）。
- 北海道総合政策部（2010）「市町村別面積・人口・世帯数の状況」（<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/scs/shityousondata.htm>, 2010.2.10）。
- 佐々木宏ほか（2005）「調査ノート：北海道A町における高齢者一人暮らし世帯の貧困」『教育福祉研究』11、29-42。

（北海道大学大学院教育学研究院・助教）

（北海道大学教育学部・3年）